●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成 26 年 西雲寺だより 早春号（35 号）

昨年の暮れには、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要の高札も立ち、いよいよ御遠忌の年を迎えました。

私たちは今、受け難い人間として生を受け、聞き難い仏法を聞く身をいただいているのです。不思議なご縁としかいいようがありません。しかしそこには、私たちの先祖の方々が生活のなかから、仏法大事といのちをかけて聞法して下さった歴史があり、私たちはその歴史の中にご縁をいただいているのです。

ご遠忌をつとめさせていただくにあたり、私たちは、賜わっているいのちをどういただき、どう人生を歩ませていただいたらよいのか問うていきたいと思います。

もくじ

２～３ページ　親鸞聖人のご生涯・晩年の親鸞
４～５ページ　寄稿　金箔施工技師・長家（ちょうけ）さん
６ページ　寄稿　元筆頭総代内田さん・鈴木さん
７ページ　山門掲示板・念仏詩
８ページ　御遠忌のご案内

親鸞聖人のご生涯

晩年の親鸞

頭北面西右脇に臥したまいて

親鸞聖人は一二六二（弘長二）年十一月二十八日、弟の尋有の住いである善法院で、末娘の覚信尼（かくしんに）や息子の益方入道（ますかたにゅうどう）や門弟たちに見守られながら、九十年のご生涯を終えられました。そのときの様子が『御伝鈔』には次のように伝えられています。

口に世事をまじえず、ただ仏思のふかきことを述ぶ、声に余言をあらわさず、もっぱら称名たゆることなし、しこうして同第八日午時（うまのとき）、頭北面西右脇（ずほくめんさいうきょう）に臥し給いて、ついに念仏の息たえましましおわりぬ。

（世間のあれこれのことを語られることなく、ただ如来の御恩の深いことをお述べになるだけでした。それ以外のことをおっしゃることはなく、ただ絶えることなく称名念仏なさるばかりでした。そして十一月二十八日のお昼ごろ、頭を北に、お顔を西にして横になったお姿で、ついに念仏の声とともにいのち終えられました。）

親鸞聖人のご往生のお姿を拝するときに有難くいただけますのは、お釈迦さまが入滅されるときと同じ「頭北面西右脇に臥し」という「入涅槃」のお姿をとられたことです。釈尊の死は単なる死ではありません。お弟子たちは釈尊の命終を「如来は涅槃に入りたもうた」と拝みました。死を入涅槃として受け取ったのです。涅槃とは人間のうちにあって燃えさかっている煩悩（欲望）の火が完全に吹き消され、あらゆる束縛から解き放たれ、法と一味となった安らぎの世界であり、最高の悟りの世界です。そしてそれは仏道を求める者の究極の世界なのです。この聖人の「頭北面西右脇に臥し」というご入滅のすがたを描写した『御伝鈔』のおことばは私たちに苦しみや悩み多い人生を歩んだ聖人が、本願念仏の仏道に出遇い、釈尊と同じようにご生涯を人間としてほんとうに生きぬき、涅槃の世界に還っていかれたことを示して下さっているのです。私たちは聖人のご往生のおすがたを通して聖人のご生涯が尊くいただけてくるのです。

如来の恩徳を謝す

親鸞聖人ご自身も、愚禿釋親鸞と名告り、お釈迦さまによって仏弟子の一人に加えられ、本願念仏の仏道を歩み、この度無上涅槃の悟りに至る身となったよろこびと恩徳を次のように詠っておられます。

如来大悲の恩徳は
身を粉（こ）にしても報ずべし
師主知識（ししゅちしき）の恩徳は
骨をくだきても謝すべし（恩徳讃）

（阿弥陀仏の大悲の恩徳は、身を粉にしても報ぜずにはいられない　釈尊をはじめとする諸仏諸師たちの恩徳も骨をくだいても感謝せずにはいられない）

そして聖人は弥陀大悲の誓願によってこの度、「無上涅槃」を遂げさせていただく恩徳を次のように詠んでおられます。

無始流転（むしるてん）の苦をすてて
無上涅槃を期（ご）すること
如来二種の回向の
恩徳まことに謝しがたし（正像末和讃）

（いつが初めかも知らない遠い過去より、まよいを重ねてきたけれども、いよいよこのたび、その流転の苦しみをすてて、最高の涅槃の楽しみを得ることができるのは如来の大悲心より回向される往相（お浄土の往生させていただくこと）のご利益の恩徳である。）

恵信尼公のお手紙

弘長二年、親鸞聖人は九十歳のご生涯を閉じられましたが、看取った末娘の覚信尼は、越後におられる母親・恵信尼（えしんに）のもとに、聖人の往生の様子やその前後のことについて手紙を送りました。当時は届くまでに二十日程かかったようです。その手紙を受け取った恵信尼は、感慨をこめて、聖人との思い出をつづった手紙を覚信尼におくっています。その一節に、

なにとよりも殿（との）の御往生、なかなかはじめて申すようにおよばす候ふ

（何はさておき、殿（親鸞）が浄土往生を遂げておられることはいまさら言うまでもありません）

と述べ、念仏者としてともに浄土への人生を歩んできた恵信尼公は、夫・親鸞聖人が浄土往生を遂げたことに深い確信をもっておられとことを末娘覚信尼に告げておられるのです。

後世（ごせ）のいのり

恵信尼公の返信のお手紙のなかに次のような一文があります。

この文ぞ、殿の比叡の山に堂僧つとめておわしましけるが、山を出でて、六角堂に百日こもられ給いて、後世の事いのり給いける九十五日のあか月の御示現の文なり。御覧候えとて、書きしるして参らせ候う。

（この文は、殿（親鸞聖人）は比叡山で常行三昧堂（じょうぎょうさんまいどう）の堂僧をつとめておられましたが、二十九歳のとき山を出て、六角堂に百日参籠（さんろう）され、後世の事をいのられ、九十五日目の夜明け頃、救世（くせ）観音菩薩の夢告を受けられたご示現の文です。ご覧になって下さい。）

このなかで、親鸞聖人は比叡山で堂僧をつとめておられたこと、そして二十九歳のとき山を出て六角堂に百日間籠り、九十五日目のあか月、救世観音菩薩の夢告を受け法然上人のもとに行かれたことが記されています。このお手紙によって私たちは初めて親鸞聖人が比叡の山で何をされておったのか、またその後どうされたのかを知ることができたのです。

「後世の事をいのる」とは何を意味するのでしょうか。何か切羽詰るものを感じます。比叡山で二十年間自力の修行をされましたが、いかんとも救われがたい自分を見い出されたのです。「後世をいのる」ということばの中に、何とかいのちある間に、このいのちを捧げることのできるような真実なるものに出遇いたい、そして人間として生れてきた意味を明らかにしたいといういのちの要求が親鸞聖人をゆり動かし、百日間の参籠となったと思われます。

私たちは日頃、自分のいのちを自己執着のなかに閉じ込め、都合のよい時にはよろこび、都合の悪い時には、暗い顔をし、他人をうらやみ、また老病死するいのちのすがたに眼を閉じて、健康と長生きを願って生きています。このような生き方しかできない私たちですが、このいのちの底には、親鸞聖人と同じように真実なるものに出遇い、賜わったこのいのちを本当に尽くしていきたいといういのちの願いがあるのです。それを宗教心といってもよいのでしょうが、それは自分の都合によってしか生きられない日頃のこころによって閉ざされている私たちには、表に出てくることはないのでしょう。それは聞法によって目覚めていくものなのです。私たちは聞法をとおして私たちにかけられている如来さまの願いを聞いていくのです。

親鸞聖人は六角堂参籠の九十五日目のあかつき、救世観音菩薩の化身といわれている聖徳太子の夢告をうけ、法然上人のもとを訪れ「ただ念仏して弥陀にたすけられよ」とのおおせに直ちにうなづき、「雑行を棄てて本願に帰す」と自力執心の仏道から、すでに見い出され、願われておった、大悲の本願によって生かされ、たすけられてゆく身となられたのです。

後生（ごしょう）の一大事

浄土真宗のみ教えを表わす特徴的なことばとして「後生の一大事」があります。私たちの先輩であるお同行たちは、無病息災とか家内安全など現世の利益を求めませんでした。「後生の一大事」にこころをかけて聞法してこられたのです。「後生」ということばは大変誤解されることばですが、単に死んで後ということではありません。私たちは只今、いのちの行き先に思いをいたすと暗く不安であり、何かむなしさを感じざるを得ません。これは賢い人も、愚かな人も、財力や権力を持っている人も、持っていない人も、「生、老、病、死」という重い宿業を抱えて生きている以上、皆平等に感じることではないでしょうか。それで私たちの先輩方は、このようないのちの暗さを破り、本当の拠り所となる真実を求めて聞法求道されたのです。これを「後生の一大事」といったのです。本願寺の蓮如上人は

後生たすけたまえと、弥陀をたのめ

という表現をしておられます。このおことばは私が「弥陀をたのむ」ようにとれますが、私たちに「後生をたすけたまえ」とか「弥陀をたのむ」というこころはありません。自己執着あるのみです。これはご本願の大悲のおことばです。大悲の本願が私たちの無明煩悩を照らし出し、南無阿弥陀仏の名号となって、どうか「われをたのんでたすかってくれ」と呼びかけ、目覚めしめつづけているのです。そのおこころが私に至り届いたのが「弥陀をたのむ」ということです。「後生の一大事」ということばは、私たちが人間に生まれた以上、必ず求めなければならない大切なことを教えていることばです。

（住職）

西雲寺内陣修復工事　金箔施工部門

金箔施工技師　長家（ちょうけ）功治

この度ご縁あって、昨年から本年にかけて西雲寺様の内陣修復工事の金箔施工を担当させていただいて居ります。金箔施工に関し、少々ご説明をさせて頂きます。

先ず、金箔ですが、金箔はお隣、石川県金沢市で生産されております。

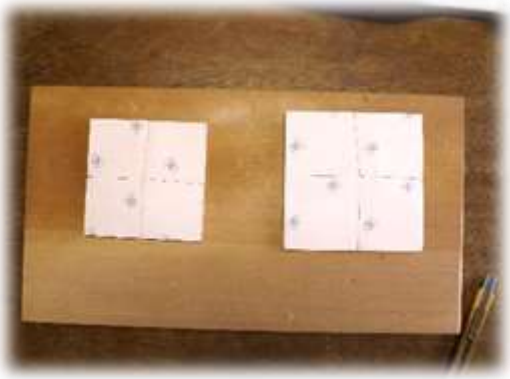
金箔の製造工程は大まかに三段階に分かれます。

工程一　延金（のべきん）（百分の三ミリまで）

工程二　上澄（うわずみ）（千分の二～三ミリまで）

工程三　箔打ち、箔移し（一万分の一～二ミリまで）

このようにして本当に薄い薄い金箔が出来上がります。ですから、金箔を扱うときは、クシャミだとか、咳払いは一切できません。もちろん鼻息の荒いのもだめです。



次に、塗師屋さんが長い時間と手間をかけて、塗り上げた内陣の長押、桁、柱等に金箔を貼り付けていくわけですが、寺院に使用する金箔は、仏檀等に使用する金箔より大きいサイズのものを使用します。普通の金箔は三寸六分箔（写真左）、寺院用は四寸二分箔（写真右）です。

その金箔を何で貼るのか？それは生漆です。硬さ、粘り、乾きのそれぞれ異なる生漆を作業する日の温度、湿度等を配慮しながら混ぜ合わせます。この生漆の調合によって、仕事の流れ、出来栄えが変わってしまいます。そこは長年の職人の勘で、漆を調合します。この調合を間違えると、その日の仕事がスムーズに、そして綺麗に仕上がるか、どうかが決まってしまうといっても過言ではありません。

次に、調合した生漆を塗り面に綿、刷毛等で塗り伸ばし、その塗り伸ばした漆をガーゼに包んだ脱脂綿、漆拭き上げ用紙で拭き込みます。（塗面に生漆が均等に行きわたらせる為）それによって、金箔の艶が一定になるのです。この拭き上げ作業も職人としての勘のいるところです。

いよいよ、金箔を貼り合わせていきます。生漆を塗って拭き上げた面に金箔を箔箸で一枚ずつ貼っていきます。形大きさに合わせて、金箔を貼り合わせていきます。生漆が入った部分を全部貼り終わったら、柔らかい真綿等の柔らかい綿で、金箔の上を撫で込んでいきます。金箔下の漆が柔らかいので、金箔に傷がつかない様にやさしく撫で込みます。

生漆を塗り面に塗り伸ばしてから、拭き上げ、金箔貼、撫で込みまでは時間との勝負です。調合した生漆と、その日の温度、湿度等で、漆の乾き時間が変わってきますので、ノンビリとはしておられません。もし、乾きが早く、撫で込みが遅れると、金箔の継ぎ目が切れてしまい、下の漆が黒い線となって出てしまいます。これを我々は箔切れといって、失敗となり、その部分はすべて金箔を拭き取り、初めからやり直しとなります。

金箔施工の大まかな流れを説明させていただきましたが、仏壇の場合は、品物を動かすことができますので、体は意外と楽ですが、寺院の現場作業となりますと、足場の上での作業、脚立の上での作業、下の方の作業では、屈み込んでの作業と、無理な体勢での作業が多く、大変体を酷使します。

しかしながら、作業を終えて綺麗に仕上がった内陣、外陣等を見ると、職人としての充実感と申しましょうか、本当に満足感を覚えます。

この仕事に就いて、早四十年が過ぎました。仏壇はもとより、沢山の寺院の修復工事に携わることができました。今まで何の事故もなく、健康で、元気に、明るく仕事に打ち込めることに改めて感謝です。

この度は、西雲寺様の素敵なご縁を頂き、ありがとうございました。

寄　稿

宗祖親鸞聖人七百五十回忌御遠忌法要を迎えて

武周　内田健治

この度、真宗仏光寺派　専念山西雲寺において、宗祖親鸞聖人の七百五十回忌法要が勤修されるにあたり、元総代として一言御挨拶を申しあげます。少子高齢化とともに若者の都会流出が続く現状を見るに、今後の寺の運営に支障が出ないか、不安を感じているところであります。

毎年恒例の報恩講にお参りをしてありがたい説法を聞くたびに浄土真宗御開山　親鸞聖人の苦難の生涯を少しずつ知ることが出来るようになりました。多忙な毎日の中では、なかなか読書はむずかしく、私にはお寺参りで聞くお説教が人として生きる道の道しるべとなっております。

これからも永遠に続くであろう真宗仏光寺派西雲寺の門徒として、宗祖の恩恵にすがりながら「南無阿弥陀仏」のお念仏を称えてまいりたいと思っています。

大遠忌に寄せて

武周　鈴木春夫

宗祖親鸞聖人７５０回忌法要に当り、これ等の記念事業の大成功を目指して、昨年春以来、本堂のお内陣をはじめとする本格的な大改修事業に取り組み、特にお内陣に於いてはどこをみてもひかり輝き立派になり、何時本番を迎えてもと言う感じとなりました。

この事は勿論住職の献身的な働きやお同行皆さんの沢山なご奉加の力で出来たに違いありませんが、住職として献身的に働かせ、門信徒の皆さんに物心ともに特に大事なヘソクリを投げ出させたのは、仏様の御力、この一言に尽きるような気がいたします。したがって、一番うれしいのはお内陣のまん中に立っておられる阿弥陀（本尊）様だと思います。

私達は、大遠忌の成功に力を尽くし、この素晴らしいご縁を、子や孫たちに相続していきたいものです。

美しい古里づくりを目差して

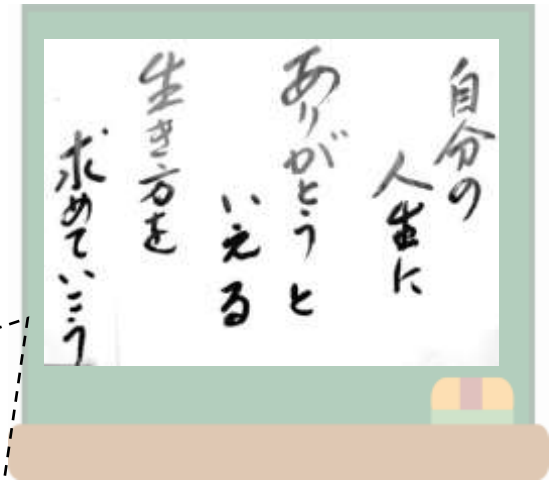
内田健治

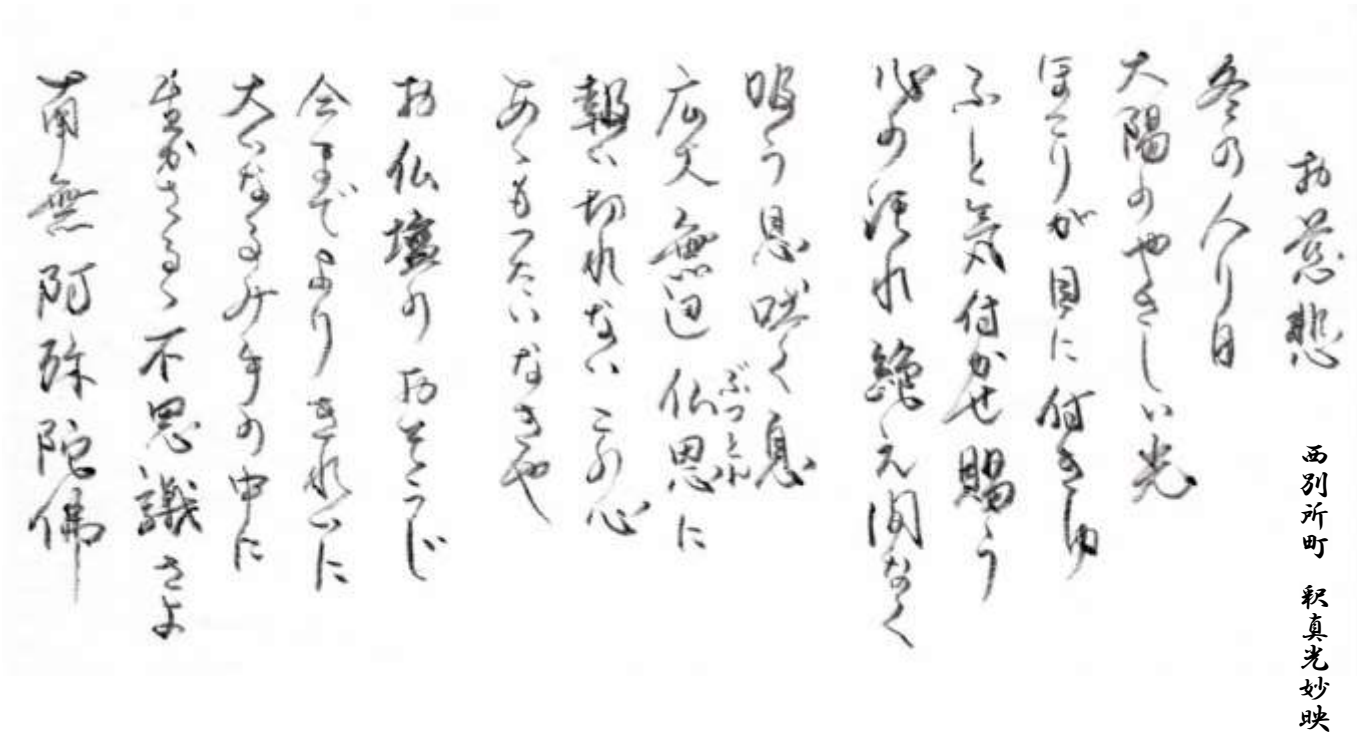
我家の玄関を出て　すぐ西の空をながめるとお寺の境内に巨大な樹木が天高くそびえています。幼少の頃、祖父が人生の教訓として教えてくれた　トガの巨木である。

この地の歴史をながめながら何百年の年輪を重ねてきた大樹である。今祖父と同様の立場にあり、可愛い孫にこの地の歴史を語る時、このトガの巨木を語らなくてはならない。風雪に耐え、干ばつに耐え、多くの人々に見守られて、今の姿があるのです。人は独りでは生きられないものであり、お互いに力を合せ共同の精神で、これからの難局をのり越えて行かなければならない。毎年多くの観光客が武周ケ池や越知山、西雲寺のしだれ桜等に訪れるようになり、町内の外観を考えなくてはならなくなった。「きれいな所だね」と声を掛けて下さる人々に対し、笑顔で応えられる様な環境の整備を考えていかなければならないと思っています。

私たちは、自分の人生を終えるときに、どういうことばを残すのだろうか。はなはだ気になることです。よく命終るとき、家族にありがとうと最後のことばをかけて亡くなっていかれたとお聞きすることがある。このことば一つによって、その臨終の場がやわらぎ、有難い雰囲気につつまれます。そして亡くなっていく人も、家族もともに救われていくのです。有難うということばにはそのような大きな力があるのです。しかし死に際してありがとうということばがそう簡単に出そうではありません。平生の生き方が問われているのです。私たちは一人一人それぞれ深い業縁をかかえて、苦しみや悲しみに出会いながら一生を生きていかなければなりません。しかし、どのような人生であっても、有難い人生であったとうなずくことができたら、これほど幸せなことはありません。（住職）

山門掲示板





平成 26 年 4 月 27 日

於 武周 西雲寺

宗祖親鸞聖人 750 回大遠忌

皆様 おそろいで お参り下さい

午前 8 時　おかみそり
午前 10 時　内陣御修復法要
午後 1 時　おちごさん
午後 2 時　大遠忌法要
駐車場などは 4 月上旬発行の紙面でご案内いたします

おかみそりに約 70 名、おちごさんに約 180 名のお申し込みをいただきました。本当にありがとうございます。
申し込まれた方には個別にご案内を差し上げます。
しばらくお待ち下さい。

発　行
真宗仏光寺派 専念山 西雲寺（さいうんじ）
住職　護城一寿
筆頭総代　吉川芳弘
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！
お寺から郵送いたします。どうぞご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。